

様式第 2 (第12条関係)

加入国際学術団体に関する調査票

1 国際学術団体活動状況 (内規第 11 条 活動報告)

団体名	和	国際生物科学連合
	英	International Union of Biological Sciences (略称 IUBS)
	団体 HP (URL)	http://www.iubs.org (日本学術会議が加盟していることの記載 <input checked="" type="checkbox"/> 有 ・ 無)
国際学術団体における最近のトピックについて (学術の進歩、当該団体の推進体制の変化、国際機関・政府・社会との関わり方等)		従前通り ICSU 傘下の生物科学分野を総括する国際学術組織として機能している。2015 年 12 月の総会において、2016 年以降 3 カ年の活動計画が採択された。学術会議 IUBS 分科会が生物科学学会連合と連携しており、同分科会委員長武田洋幸氏は現在 IUBS 会長でもある。日本は最大の資金拠出国。
政策提言や世界の潮流になりそうな研究テーマ・研究方式・研究助成方式等について		2012 年の総会で議決された、Unified Biology が現在も IUBS の基本姿勢である。世界的な課題である、生物多様性の保全と健全な生態系の維持、次世代を対象とした生物教育の推進が重視され、この方針に沿ったテーマで 3 年を一区切りとした研究・啓蒙プロジェクトに資金援助がなされる。
日本人役員によるイニシアティブ事項や日本からの参加によって進展や成果があったものについて		日本は IUBS の主要なメンバーであり、2007 から 2009 年には星元紀氏 (元連携会員) が会長を務めている。さらに、その後を継ぐ形で武田洋幸氏が、理事、幹事長を歴任して、現在会長となって、IUBS の活動を指揮している。IUBS において、日本の存在感は高く、東日本大震災 (2011 年) 後に、日本から提案された ”Disaster and Biodiversity” の科学プログラムが採択され (2013-2015 年)、研究と啓蒙活動を推進した。
加入していることによる日本学術会議、学会、日本国民への効果やメリットについて		我が国は 1950 年に IUBS (1919 年創設) に加盟して以来、主要国の一つとして活動している。IUBS は最も歴史のある基礎生物系の連合として、世界規模の諸問題に取り組む生物学者の国際ネットワークをサポートしている。特に最近では生物多様性、地球規模の気候変動と生態系の変化、自然災害、生物教育に関連する様々な科学プログラムを主導している。これらへの参画を通して (研究者、リーダーとして)、日本の学術の存在感を世界に示すとともに、その成果をタイムリーに国民と共有している。 具体例として、科学プログラム Disaster and Biodiversity (DAB) (2013-2015、プログラムリーダー：西田治文 (中央大学、IUBS 分科会・幹事)) があげられる。DAB の日本でのシンポジウム (仙台) や日本人リーダーによる成果とりまとめを通して、国内の研究者、NGO 関係者そして日本国民に、この問題を明確に提示できた。また、昨年 12 月の IUBS 総会 (ベルリン) で、2016-2019 年の IUBS 執行部が選出

様式第 2 (第12条関係)

	され、IUBS 分科会・委員長の武田洋幸氏が会長に就任した。総会では、日本から拠出金支援、IUBS の国境のない活動を長きにわたってけん引してきた日本のリーダーシップに対しては、各国から感謝と称賛の声が寄せられた。このことは日本の科学界だけでなく、日本国民全体への評価につながっている。
その他（若手研究者・女性研究者育成法、科学者の倫理に関する当該国際学術団体の基本方針や憲章、資金提供ソースの発掘における画期的な方策等の特記事項など）	国際組織であるため、ジェンダーの問題は全く生じていない。実際、副会長、理事、事務局長は女性科学者である。さらに、アジア、アフリカなどの発展途上国の若手研究者を意識した Young Scientist Grants を創設し、科学プログラムが開催するワークショップなどの参加援助を積極的に行ってきた。

2 今後の予定について（内規第 11 条 活動報告）

総会、理事会の日本開催の予定について（招致等の予定も含め）	総会については、予定はない。 2016 年 11 月に沖縄で開催される国際動物学会議に合わせて、理事会を開催することが検討されている。
日本人の役員立候補等の予定について	現役員の任期が終了する 2019 年以降の新役員候補を今後の IUBS 分科会で選定する必要がある。
現在、検討中の日本からの提言や推進するプロジェクト等の動きについて	ICSU が推進する” Future Earth” プログラムへの基礎生物学からの貢献を現在議論しており、日本側からの提案を検討中である。

様式第2 (第12条関係)

3 国際学術団体会議開催状況 (内規第11条 活動報告)

総会・理事会・各種委員会等の状況 (過去5年間及び今後予定されているもの)	総会開催状況	2015年 (開催地: ベルリン、ドイツ)、 2012年 (開催地: 蘇州、中国)		
	理事会・役員会等開催状況	2016年 (開催地: 那覇、日本) (予定) 2015年 (開催地: ベルリン、ドイツ)、 2014年 (開催地: パリ、フランス)、 2012年 (開催地: パリ、フランス)、 2011年 (開催地: ローマ、イタリア)		
	各種委員会開催状況	年 (開催地:)、年 (開催地:)、 年 (開催地:)、年 (開催地:)、 Ad hoc internet (Skype) meetings は随時行われている		
	研究集会・会議等開催状況	2016年 (開催地: Cancun、Mexico) (予定、COPに合わせて)、 2016年 (開催地: 那覇、日本) (予定)、 2015年 (開催地: 西安、中国)、 2014年 (開催地: ポツダム、ドイツ)、2013年 (開催地: イグアス、ブラジル)、2012年 (開催地: ビラ、フィンランド)		
上記会議等への日本人の参加・出席状況及び予定	2011年 理事会 (ローマ)、1人 2012年 理事会 (パリ)、1人 2012年 総会 (蘇州)、4人 (うち代表派遣1名: 西田治文) 2014年 理事会 (パリ)、1人 2015年 総会 (ベルリン)、2人 (うち代表派遣1名: 西田治文) 2016年11月 ISZS シンポジウム (那覇) --- 第22回国際動物会議と合同のため多数の日本人の参加が見込まれている。			
国際学術団体における日本人の役員等への就任状況 (過去5年)	役職名	役職就任期間	氏名	会員、連携会員の別
	幹事長	2012~2015	武田洋幸	(22期) 会員・ 連携
	会長	2016~2019	武田洋幸	(23期) 会員・ 連携
		~		() 期) 会員・連携
		~		() 期) 会員・連携
		~		() 期) 会員・連携
		~		() 期) 会員・連携
出版物	1 定期的 (年 回) 主な出版物名			
	2 不定期 (特集号) 主な出版物名 Biology International (2016年以降電子版)			

様式第 2 (第12条関係)

活動状況が分かる年次報告等があれば添付又は URL を記載
(<http://www.iubs.org/>)

)

様式第2 (第12条関係)

4 国際学術団体に関する基礎的事項 (内規第3条、4条、5条)

国内委員会 (内規4条第3号)	委員会名	IUBS 分科会
	委員長名	武田洋幸
	当期の活動状況	(開催日時 主な審議事項等) 平成 27 年 5 月 7 日に分科会を開催し、12 月ベルリンで開催予定の IUBS 総会での会長、役員選挙への対応、サイエンスプログラムの提案と参加について協議した。特に、今後 IUBS が基礎生物のサイドから参加を予定するプログラム、” Future Earth” の重要性が認識され、そのため関連する 2 名の連携会員に新たに分科会委員として加えた。
内規第3 (国際学術団体の要件関係)	国際学術交流を目的とする非政府的かつ非営利的団体である 1. <input checked="" type="radio"/> 該当する 2. <input type="radio"/> 該当しない ※根拠となる定款・規程等の添付又は URL を記載 (http://www.)	
	各国の公的学術機関及び学術研究団体等が国際学術団体に国を代表する資格を有して加入するものが、主たる構成員となっている (主たる構成員が、いわゆる「国家会員」であるか否か) 1. <input checked="" type="radio"/> 該当する 2. <input type="radio"/> 該当しない ※根拠となる資料の添付又は URL を記載 (http://www.)	
	下記の事項 (ア～エ) のいずれか一つに該当するか (該当するものに○印)	
	ア 個々の学術の専門分野における統一のかつ世界的な組織を有するもの	
	イ 研究の領域が複数の専門分野にわたるものであって、統一のかつ世界的な組織を有するもの	
	ウ <input checked="" type="radio"/> 研究の領域が複数の専門分野にわたるものであって、ア又はイの国際学術団体を連合した世界的組織を有するもの	
	エ 構成員のうち、各国代表会員がアジア地域等我が国が関係する地域等に限られるものであって、当該国際学術団体の研究の領域が複数の専門分野にわたるもの	
10. カ国を超える各国代表会員が加入している 1. <input checked="" type="radio"/> 該当する 2. <input type="radio"/> 該当しない		
加入国数及び 主要な各国代 表会員を 10 記載	(33 ヶ国) ・各国代表会員名/国名 ・Deutsche Forschungsgemeinschaft (Germany) ・Chinese Association for Science and Technology (China) ・Russian Academy of Sciences (Russia)	

様式第 2 (第12条関係)

	<ul style="list-style-type: none">• Ministerio de Ciencia e Innovaciòn (Spain)• Indian National Science Academy (India)• Australian Academy of Sciences (Australia)• Det Norske Videnskaps Academi (Norway)• The Royal Society of New Zealand (New Zealand)• Finnish Academy of Sciences and Letters (Finland)• Sociedad de Biologia de Chile (Chile)
--	---